
君と私とマカロニと

プリンセス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私とマカロニヒ

【NZマーク】

N6270N

【作者名】

プリンセス

【あらすじ】

ただ単に思つたことを書き綴つたものです。GL注意

君は私が言った

「私たちがマカロニなんだよ。」

と

「なんで?」

私は首をかしげて聞いた。

「マカロニはね、近づきすぎると熱い汁がしつれてそれなくなるの。それには、温度が高すぎると解けちゃうから、歯ごたえがなくなるの。」

「ふうん。」

そつこなく返す。

だって、それは

「これ以上近寄るなって意味?」

君は困ったように苦笑する。

「ん・・・・。あんま近寄りすぎると離れなくなるでしょ?」

私は君のまつを向き直つて少しおじつたような口調で囁いた。

「いいじゃない。何がダメなの？」

「だつて、あなたも私も女同士だもん。きつと・・・私から離れるでしょ。そのとき・・・困るでしょ？」

君は少しうつむきながら哀しそうに答えた。

「・・・いらない。私は君以外要らないものー。大人になつても、ずっと、ずっと一緒にいるのよ。離れたいなら、殺して死んであげるわ。」

ゆつくりとしてそれでも刺々しい言い方をする。

すると、君が笑い出す。

「・・・君が言つと冗談に聞こえないよ。でも、ありがと。」

「あら？[冗談で言つたつもりはないんだけど。」

今度は一人で笑い出す。

「愛してるよ。」

「当たり前。」

マカローのよへ元へつ付いてしまえばいいんだ。

君が私から離れれないように。

マカローのよへ元へ溶けてしまえばいいんだ。

私が君から離れれないように。

私のじつわというね　ｗｗ
まあ、ちょっといじつてるけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270z/>

君と私とマカロニと

2011年12月20日23時47分発行